JICAだより

所長挨拶

JICA札幌所長　中島 行男

北海道の皆様、こんにちは。4月1日をもってJICA札幌に着任いたしました中島と申します。

私どもは、皆様のご理解とご支援を得て、この小さな地球で「人が人として人らしく生きて行ける社会」を目指して国際協力の仕事を行っています。

かつては日本も開発途上国でした。決して一国でこのような国になったわけではありません。第二次世界大戦後の米国やユニセフからの援助は、伝染病や栄養失調に苦しむ子供たちを助けてくれました。北海道にも新幹線が走ることとなりましたが、1964年に開通した東海道新幹線は、世界銀行からお金を借りて作ったものでした。小樽には石原裕次郎さんの記念館がありますが、裕次郎さんが主演した「黒部の太陽」の舞台になった黒部ダム（1963年完成）も同様です。古くは中国の唐も、日本からの留学生や留学僧を約1万人も引き受け、264年の長きにわたって知識・技術を授け、面倒を見続けてくれました。

このように日本は、世界の人々から助けられて今日の姿になりました。これらの歴史的恩義を顧みたときに、私たちは「いま」、何をすべきでしょうか。私たちが暮す地球を眺めた時、赤道を中心に北緯30度から南緯30度の間は亜熱帯のベルト地帯です。そこに約130の国々が横たわり、約11億の人々が貧困、疾病等に苦しんでいます。これらの国々の人々に対して、私たちが今成すべきことは、実に平凡で当たり前のことですが、先達が汗水流して目指してきた、「人として安心して暮らせる世の中を一緒になって作ること」ではないでしょうか。

JICA札幌は、「北海道の開拓精神」をしっかりと継承しながら「北海道民の知識と技術」をもって開発途上国の国造りに当たっています。その内容は、海を越えてやってくる開発途上国の技術者に対する道内での技術研修、道内の「専門家」を技術指導者として開発途上国派遣することや、老若男女による「青年海外協力隊・シニア海外ボランティア」の派遣事業などがあります。さらには、明日の北海道・日本を担う青少年の人材育成のために、開発教育を介して側面支援を行っております。

JICA札幌は、皆様が海外に行かれた際に、皆様が、「どんな国際貢献をしているか？」と問われた時に、「私どもはJICA札幌を通して、困っている人々にいろいろな手を差し伸べています」と胸を張って答えられる組織を目指しております。

今後ともJICA札幌へのご協力とご支援を、切にお願い申し上げます。

好評をいただいていた「シニア海外ボランティア体験記」に替わり、今号から青年海外協力隊参加経験者の帰国後談を掲載します。青年海外協力隊は1965年から派遣が始まり、20歳～39歳までのボランティア2200人余りが、現在69カ国で活躍中です。（北海道出身の青年海外協力隊員は50カ国、109名が活動中）今回は1999年12月から2年間、アフリカのマラウィでサッカーを教えていた、坂田蔵人さんからの帰国後談です。

青年海外協力隊員 帰国後談

国内協力員を終えて…。

JICA札幌国内協力員
坂田　蔵人

青年海外協力隊OB　マラウィ国派遣
職種：サッカー
（派遣期間　1999年12月～2001年12月派遣）

「あの…、海外で何かしたいんですけど。今の人生に満足できなくて…」。

これは私がJICA札幌で国内協力員として、ボランティア募集業務をする上で一番多かった問い合わせである。私の主たる業務は、JICAボランティア募集・選考・派遣に関わるもので、その他として学校の「総合的な学習の時間」（国際理解教育の授業）での講師などである。青年海外協力隊としてアフリカの地で2年間過ごした私にとって、国内協力員として携わった日本国内での国際協力業務は、海外での活動と比較すると正直予想以上に地味なものであり、またそれと同時に意味深いものでもありました。

毎年全国で約1万人前後の青年海外協力隊の応募があるが、JICAボランティアとして開発途上国に派遣されるためには、ある程度の専門分野での経験を持っている事が必要というのが現実であり、2回の選考段階を経て最終的に合格して派遣される人は応募者の約10％である。しかし改めて考えてみて、志願者はそもそも何のために開発途上国へわざわざ行くのであろうか？

現地でサッカーのキーパーにアドバイスをする（中央筆者）